



# 殺人コーラス

## 島さち子

殺人コーラス

装  
画

島  
さ  
ち  
子

## 殺人コーラス

暗闇の中を二人の教師と二十人の女子高校生と、一人のアメリカ兵が歩いていった。

道路の右側から波の打ち寄せる音が、ザアーツ、ザアーツと、聴こえてはいたが、どんなに眼を凝らしても湖は見えなかった。湖と道路の間には木々が繁っているらしく、葉先を渡る風の音が感じられたが、見究めようにも足元さえ暗くて遠い。

これが修学旅行なのか？ 街灯も民家もない、夜がこんなに暗いものだとは……。……。笙子は心細さを払い除けるように首をきつと立てて歩いた。

突然、後から強烈な光の束が、エンジンの響きに乗って来て、いきなり何人かを黄色い縞で切り刻んだ。女子高校生に混じって、アメリカ兵、ロバート・スミスの手が派手に左右に振られていた。

「ストップ！ ストップ！ ストップ！ トマレ！ ノセロ！ ノセテクラサイ！」

トラックは徐行し、当惑している男の顔が運転席から飛び出した。

「何処へ行くんだい。おねちゃん達だけなら、乗せてあげたいけど……」。進駐軍と一緒にじゃあ、なあ。御免よ、悪いな」

「ダーディ・ジャパニーズ！ ダーディ・ジャパニーズ！」

ロバートの宙に浮いた腕と、一縷の望みを抱いた女生徒の顔の列を後に残して、トラックは無情に走り去り、辺りは再び暗闇に戻った。

「またも、同じ方向に歩くしかない。我慢を抑えきれなくなった誰かの悲鳴が、明石笙子の頭の上を過ぎて行った。」

「元氣を出しましょう！」担任の小泉美恵の声が先の方で激励していた。

「自分の足を信頼しろよ、誰も代りに歩いちゃくれない！」思いがけなく傍にいた歴史の森丸和人が、笙子の旅行鞆を掠めて歩き、活を入れるように鞆を叩いた。

もう限度だと思った時、闇に小さな光が見え、ほっとして眼を見張ると、前から来る自転車のライトの中で、ロバートと肩を組んでいく誰かの長い髪が、白い手で撫でられているのが見えた。

「みんな辛抱……。全く、かなわんなあ！」森丸が長い溜息を吐いた。

「笙子！ 笙子いる？」岩沢百合子の声だ。

「ここよ、わたしも探していたの。まるで死んで彷徨っているみたい」笙子は闇に向かって叫んだ。

「先生が弱すぎるよ。いくらアメリカ兵だからって、何処までもついてくるのを、断ってくれたらいいのに……。国語に日本史そろいも揃って英語が苦手なんだから。怖気づいているのよ」百合子の声が近づいていた。

「でも、ロバート、びっくりするほど日本語が解っているじゃない」笙子は小さな声で言った。「終戦から三年もたっているのに、まだ、たった一人のアメリカ兵に言いたいことも言えないんだから情けないね。私たち、先生方の戦後の豹変振りを見てきているじゃない、今のありさまも、しっかりと眼を開けて見ておこうよ！」

笙子の踵に出来た水泡が破れて靴下に滲み、痛みを通り越して無感覚になっている。

それにしても声も上げずに、ロバート・スミスと肩を組んで行く長い髪は誰だろう？ 長い髪の何人かの顔が次々笙子の脳裏を掠めた、牟田渚でなければいいが……。

ロバート・スミスが現われたのは、東山温泉に一泊し、会津若松から郡山経由、仙台行の列車に乗り込んでほっとした時だった。

占領軍の専用車の通過で、待ち時間が長くなっていた。

二三人のアメリカ軍人を乗せた、がら空きの列車が、乗車口まで鈴なりの日本人を乗せた列車の脇を通り過ぎて行った。

その時、笙子の耳に日本語交じりの英語と、甲高い女生徒の笑い声が入り込んできた。

振り向くと後部の座席に若いアメリカ兵がいたのだ、肌は不透明な白過ぎる白さで、ブロンドの髪、薄茶色の明るい瞳。車内の好奇心な視線に曝されながら、大津まゆみの座席の腕木に腰掛けていたのだ。

「ワタシ、ロバート・スミス、デス。ミンナ、ビューティフル・ガールネ！」若いアメリカ兵は大げさな身振りでお世辞を言っていた。いままで外国人と接したことの無い物見高い女子高校生の紅潮した顔のなかで眼が生き生きと光っていた。彼女達は国際的美人として認められた位の、いい気分であるらしかった。

翁島で下車した時、笙子は思わず声を上げた。ロバート・スミスもここで下車し、片手にウイスキーの壺を持って、ラッパ飲みしながらついてきたのだ。

外人らしいX脚がよろけ、時々立ち止まっては後を振り向いている、何処までもついてくる気なのだ。ロバート・スミスを中心にして半円を描き八人ばかりの女生徒が移動していた。

「同じ旅館に止まる気かしら？」百合子が呟いた。目的の猪苗代湖の宿まで3km、平坦な畑の中の道は人通りもない。

「下駄、日本のシューズ、どう思いますか？」

「学校の六三三制について、どう思いますか？」

彼を取り巻くグループでは日本語の質問が飛び交っていた。

「オオ、ジャパニーズ・シューズ。アレ、足サムイデス。指グッバイスルノ、ノー、イイマス」  
ロバートが笑わせていた。笙子達はその後ろから、のろのろ歩いていた。

その時、牟田渚が天津まゆみの前に走り出たのだ。

「どうしたの？ あんた達、何故、狼と一緒に修学旅行してるの？」

「渚さん！」あわてた小泉美恵の押しとどめる声が、渚に捕虫網のように被さった。何しろ相手は進駐軍、ことが起ったら大変ということ。

「この人、何処からきたの？ ねえ！」

「渚さん、失礼よ。ロバート・スミスさんはアメリカの軍人さんで、休日を楽しんでいらっしやるのよ。自由の国の人だから彼の意味で何処にもいけるわ。私達がとやかく言えて？」

「怖い！ 狼の牙が隠されているのよ！」渚は言いながら天津まゆみを押し退けた。

「あなた、おかしいんじゃないの。人種が違っててもみんな友達、ねえ、ミスター・ロバート」

まゆみはアメリカ兵を庇うように立って一歩も譲らない。

笹子は渚の腕を引っ張った。その時、後から見たロバート、スミスの、G I刈りの髪は、上がブロードなのに、刈り口は白くなっていて、首筋から項にかけて、色のない毛が密生していた。物珍しさに笹子がおも眼を近づけていくと、

「マイ、バカンス、エンジョイネ」ロバート、スミスが振り返り、怖い顔になって笹子を睨んだ。

「そうよ、修学旅行は、こういう出会いを生かして学ぶことに意義があるのよ。ねえ、先生！」

まゆみが小泉美恵に媚びるように言った。

笹子は渚をうながして、先に行った森丸和人に追いつく為に走った。



岩沢百合子が歌いだし、何時の間にかハーモニーをとって、流浪の民の三部合唱になっていた。皆の言いたいことを渚が代弁してくれたような、快さがあつたのだ。

旅館は古い和風建築で、玄関を入ると広い土間があつて。主人が愛想よく女性徒の勢揃いするのを待っていた。

ところがロバート・スミスを見た途端、主人の態度が豹変したのだ。幾分蒼ざめた顔で、そそくさと家の中に引き揚げてしまい、引率の森丸と小泉がそれを追つて帳場に入り込んでいった。

生徒は土間に待たされていた。誰かが魔法瓶からお汁粉をコップに注いでロバートに差し出した。

「オオ、ヨーカン・ウオター！」ロバートは大げさな叫びを上げ、ためらいもせずに一気に飲み干した。女生徒のやんやの喝采。

「ヨーカン・ウオターだつてさ」笙子は渚に肩を窄めてみせた。

引率教師が交渉を始めてから、一時間以上が無為に過ぎていった。不安な眩きが生徒達の間を広がつた頃、森丸が出て来て前に立った。

「甚だ残念だが、こちらの旅館で御不幸があり、我々の宿泊を勘弁願いたいとのことだ。大分粘つたが、駄目だった。致し方ない。受け入れてくれそうな旅館に電話していて時間を取つた、今度の宿泊先はここから猪苗代湖に沿つて、大分歩かなければならないが、一本道だから、道に迷うことはない。諦めて移動しよう。分つたかな！」

皆は意外なことの成り行きに、呆れて声も出せないでいた。

笙子は一人で旅館の気配を探ってみた。押し殺したような静けさはあったが、何処にも線香の匂いも、不幸のあった悲しみも、取り乱した慌しさも感じとれなかった。とすると、ロバート・スミスが一緒である為に断られたのではないかと、ふと思った。

ロバートは説明を一生徒のように聞き、周囲の生徒の驚きと失望に歪んだ顔とは対照的に無表情だった。もしかしたら、ロバートにだけは予期出来た扱いなのではないだろうか？

「やっぱり、わたしが心配していた通りになったわ」渚がククッと笑って見せた。

東北の、十月の夕暮れは駈け足でやってきて、外に出た頃には、もう闇が立ちこめていたのだ。この闇の中、笙子達は列も作らないし点呼もしなかった。みんなばらばらであることを欲していたのだ。

笙子達は戦災を受けたり、勤労働員に行ったりはしなかったが、教育の空白と空腹を受け取り、諸に価値の崩壊に付き合わされたのだ。その意味では、この頃になっても、ある種の攻撃を受け続けているような気がしていた。

女学校入学時、二百人いた同学年は、五年で大部分が卒業し、六年後、新制高校第一期生として生き残っているのは、僅か二十人になっていたのだ。

終戦後、進駐してきたアメリカ軍に校舎を接收され、泣きながら机や椅子を運び出した日のこと。あの頃見た進駐軍は首の太いピンク色の顔を、二メートル近くまで持上げていた。ロバートとは人種が違っていたような気がする。六カ月後、接收解除になって帰った校舎の床は、白くそそげたち、学校中に消毒臭がみちみちていた。教室のガラス窓には、裸のグラマアな女性像がいくつとなく貼りつ

いていて、いくら擦っても擦ってもとれなかった。

右手の波の音が高くなった、また湖畔に接近したのだろう。月も星もない闇夜だった。笙子達は戦後、山盛りの自由を飢餓の中で与えられたから、他人が何をしようかと迷惑のかからない限りは、互いに文句をつける気はなかった。然し、いま見過ごしていいのかどうか、笙子には分らない。勘の鋭い渚は不眠で、精神状態が不安定だ。

「でも渚の傍にいと疲れる。笙子、そう思わない？」百合子が暗闇のなか、誰にも聴こえる声でいった。

「渚は昔からあんなふうよ。わたしとしては、彼女の傍にいと、何故か、自然で素直な気持になれる。」

みんなが恐怖から逃げるように走り出した。行く手に灯火が見え、ゆっくり上下に振られるのが見えた、旅館に着いたのだ。

笙子が辿り着いた時、ロバート・スミスが胸に十字を切って玄関から入るところだった。小泉美恵は、其の様子を見てほっとしたように腰を落した。

「彼、敬虔なクリスチャンね。悪者ではなさそうだわ」スリッパに穿き替えながら言った。

生徒達はこれで安心し、ロバート・スミスに対する警戒心を解いていった。

「ねえ、ロバートの部屋は向こうの一番奥よ。今覗いて来たんだから」野々村陽子が注進に及んだ。「グッナイ・サーって、あたしに挨拶してくれたわ」

「嘘！ 女性に向って？」平華子が首を傾けた。疎開してきた彼女は英語が得意だ。

「嘘じゃない、ほんとだってば！」

「彼、浴衣を着てあぐらをかいていたわ。嘘と思うなら見てきてよ」

物見高い二三人が、またも忍び足で出で行くと、何人かは部屋から顔を出してそれを見ていた。

「お風呂に宿の人が彼を案内していったよ」「お風呂は男女別々なんですよね」

「こんな小さい旅館だからともすると………、どうかわからない、温泉じゃないし」

「まさか、まさか、おお、嫌だ！ ロバートの入ったお風呂に入るなんてこと！」渚が身震いしながら言った。「精子が浮いていたら、妊娠してしまうじゃない！」

産婦人科医の娘が言うのだから、みんな心配顔になって声を潜めた。

「入浴したいわ。浴室どころか見てこようか」百合子が言い、笙子が後に続いた。

浴室は一つしかなく楕円形の木の風呂は、人一人入るのがやっとの小さなもので、シャワーもなかった。室内に湯気が籠って、硝子が白くなっている。

百合子が蓋を取って、声を呑んだ。湯の表面に消しゴム屑のような白い垢が一面に浮き上がっていたのだ。みんなの眼が茫然とそれを見ていた。

「これは間違いなく、ロバート・スミスの垢だあ！」

「あちらでは、浴槽の中で垢を落すらしいわ。石鹸も使うみたい」華子が言った。

広間で朝食並の簡素な夕食を取った。突然の宿泊で材料が間に合わなかったらしい。それでも泊め

て貰うだけで感謝したいような、妙に気落ちした気分だった。十二人と八人、十二人は母屋に、八人は渡り廊下で続く離れに寝床が敷かれていた。

「小泉先生が渚にゆっくり休みなさいって、あの先生青い顔してた。葡萄っ子を産んだとかで、後が思わしくないって聞いたけど」百合子がいった。

「葡萄っ子って何のこと？」

「さあ、渚なら知ってるかもね」

渚は布団の上に仰向けになったまま、煩そうに、顔の上に載せていた枕を取って腹の上に載せ替えた。

「知ってる、本当は泡状鬼胎って言うのよ。内の病院で、葡萄子が生れたことがあったわ。驚いたなあ。ほんとに葡萄の房みたいになっていて、看護婦さんが珍しいからって内緒で見せてくれたの。銀色のトレイに入った葡萄子は、ミルクを注ぎ込んであげるとチュツチュツと音を立てて、ミルクは見る間に減っていった……」

「今でも生きてるの？」

「ううん、生きていない」渚が蔷薇色の舌先を丸めた。

「婦人科病院の一人娘ってどんな気分？」百合子は渚の情緒不安定を紛らわすために、話を続けさせようとしていた。

「嫌なものよ。妊娠中絶ばかり多くて、母なんか柔らかい子宮を掻き回すのに飽き飽きしたと言って

る。怖いんですって！ 女は嫌だと言っているのよ。……それなのに、このクラスに何人か森村先生の子供を産みたがってる！」

渚の言葉は爆弾みたいだ。笙子は自分の顔が赤くなっていくのがわかった。

広間で家庭科の生徒がフォークダンスでも始めたのか、音楽に混じってロバートやまゆみの笑い声が、遅くまで聴こえていた。

渚は不眠を訴えていたのに今日はさすがに疲れたのだろう。閉じた目と目の間に、細い静脈が青く蛇行していた。鼻柱が通って、はっきりとした二重瞼、唇から顎の線の魅惑的な丸み、まだあどけなさも残している、この顔に隠れている暗い部分は動きを止め、今、静かに眠りについていた。

笙子は一人で縁側の椅子に身を沈めた。疲労しているのに、蒲団に身体を横たえる気にはなれなかった。

どこかで物音がしたような気がした。ぎくつとして目を開けると、部屋の隅に片寄せられているスーツケースや鞆類の周りを白い手が素早く動いている、出て行く横顔はまゆみだった。まゆみの持物がこの部屋に紛れ込んでいたのだろうか。笙子は後を追って廊下に出た。忍び足で歩く音がかすかに聴き取れる。まゆみはこともあるように、森丸の部屋に入っていった。

笙子は信じられないものを見たショックで、慌てて部屋に舞い戻った。それにしても、まゆみと森丸の間には何があるのだろうか。さっき渚のいった言葉に強烈に揺さぶられ、恐怖とも嫉妬ともつかないものが、部屋に帰っても笙子の声を封じていた。心が森丸とまゆみの回りをぐるぐる回転し、隙が

あつたらまゆみを押し退けようと身構えていた。うつ伏せになると涙が枕に沁み込んでいった。

笙子は何時の間にか眠ってしまったらしい。ふと目覚めると渚の寢床が空になっていた。朝の散歩に出たのだろうか。跳び起き服を着替え、コートを羽織つて外に出た。まだ時計は四時、渚は何をしに、何処へ？

廊下の戸が僅かに開いているのは外に出た証拠だが、外は暗く笙子一人で行くのは心細かった。

「渚！」叫ぶつもりが、息だけ青白く吹き飛んでいく。

呻き声が聴こえる。音を探つて横に動いた。闇の中黒い人影が視野をかすめ、うろたえた眼の焦点が定まらないうちに見えなくなつた。何かに足がつかえた。低い位置に二つの乳房を見分けた。スリッパの肩紐が千切られ腰までずり落ちている。その向こう、渚の顔が落ち葉の中にめり込んでいた。

笙子は腕を渚の下に入れて背を探つた、まだ温かい、息もしている。死んでなんかない、生きていけるじゃない。細い首筋に鬱血した指の跡が痛々しい、笙子はコートを脱いで渚を包んだ。早く何とかしなければ、渚は気がふれてしまうだろう。

渚は気力を取り戻したのか、膝を引き寄せ腕に抱え込んでから、両手を地面に突っ張つて、膝頭で起き上がるようにしたが、襪襦切れのように転がってしまった。

笙子は素早く、剥ぎ取られた衣類を掻き集めた。誰かがそれを足で蹴り上げた。

「声を出すな！ 出すと撃つぞ！」ロバート・スミスが身を隠していたのだ。

胸の鼓動が鼓膜を叩きまくる。笙子の背中にピストルの銃口が喰いこんだ。足は竦んでいたが、銃

口に対する反射運動のように前に出た。

「逃げるのよ！」叫んだつもりが声にならない。箏子はロバートの操るままに歩いた。石に躓いて転んだ時、今まで叫んでも声にならなかった声が、犬の遠吠えのように響き渡った。

「ヨクモ、邪魔シテクレタナ！」いきなりロバートの二の腕が箏子の喉にかかった。必死で腕に噛み付き、彼のひるむ隙に、喉を精一杯開けて泣き声を浴びせた。

「私が何をしたというの！」ピストルでやられるのなら、もう命は亡くなっている筈よ、まだ舌は動いていた。

「負けた国の人には何をしても構わないとイエス様はおっしゃったの？ 人でなし！」頬に焼けるようなパンチが入って、体が吹っ飛んだ。

ロバートの喉仏が、喉の中央でピンポン玉のように上下している。酒気を帯びた荒い息遣いが頬に吹きかかった。

衝撃が次々やってきて、体ごと打ちのめされたり、浮き上がったたり、意識が遠くなつて、急に体が軽くなった。

気を取り戻した時、握り締めている石に血がべっとり付いているのが見えた。

「箏子！」霧の彼方からのような声が、突然耳元で大きくなる。

衝撃を直接受けたのはロバートで、箏子ではなかったのだ。

みんな、ロバートめがけて後ろから打ちかかったのか、それぞれの手に薪が握り締められていた。



夜が明け始め、朝霧の中、地面すれすれに來た薔薇色の光の粒が、ロバートに取り付き輪郭を不明にしていた。笙子はみんなに命を助けられたのだ。ロバートはこつちをたかが女の子と見て、隙を窺っているのか、伸びたまま呻き声も出さない。

遅れて來たまゆみがロバートを尙もスコップで打ち据えた。

「こいつ、泥棒だよ！ 泥棒をやったんだ！」叫びながらまゆみの手がロバートの上着のポケットから紙幣の束を探りだし、途中で拾ったという森丸の鞆のなかから、様々な財布を取り出した。どれも中は空っぽだった。最後に男物の大きな財布を取り出すと、まゆみは憎々しげにロバートを足蹴にした。

笙子は今までの謎が解けた気がした。まゆみはロバートの手先に使われ、森丸の部屋には、この鞆を盗みに入ったのだ。朝方、ロバートとまゆみが外に出て行くのに気付いた渚が後を追い駆けた。

「ロバートを警察に引き渡そうか」いいながらロバートの頭の方に回った野々村陽子が、口を開けたまま動かない。

みんなその異様にたじろぎ、声も立てない。

ブロンドの髪が血に染まって、とろ火のように光っていた。フウーツと血生臭い臭気が漂っているのに始めて気がついた。百合子がロバートの鼻の上に手をかざした。息をする空気のそよぎは感じられない。

笙子は誰かにうしろから小突かれた。渚が円陣を押し分けてロバートの傍に立っていた。

「死んでる。でも怖がらなくていいのよ。悪いのは、この男なんだから」渚は声を上げて笑った。ロートの下から血で汚れた裸足が覗いていた。

ロバート・スマスは死んだ、ロバート・スマスを殺した。殺したのはみんなだ。渚はそう言ったのだ。ロバートが死んだとして、下手人でないとはつきり解っているのは渚ひとりだ。

「どうしよう」「どうする」「早くなんとかしなければ」「誰かが見ていたかもしれない」何人かが怯えて首を竦めたままあたりを見回した。

「泣いている場合じゃないのよ。誰か見張りを……。そう二人、霞と陽子」

百合子が震えながらも指図していた。

平華子がへたり込んだ。マリエのすすり泣きの声が聴こえている。本当に死んでいるのだろうか。笙子の位置から見ればロバートは欲も得もなく眠りこけているように見えた。

渚が憑かれたように動き続けた。まゆみが投げ出したスコップを使って穴を掘り捲くる。その音だけが、林の中に響いていた。

茫然と見つめていたみんなが、手伝いはじめた頃には、渚は泥にまみれていた。死体を引き摺ってはまずい、八人で左右から腕を入れて持上げた。重い死重の下で瀕死のムカデが這っていた。

ロバートを埋め終え、上に枯葉をかけると、みんな湖まで走った。

昨日から暗闇に隠れ続けた猪苗代湖は、今、始めて霧の中から、目の前にその巨大な姿を現わ

していた。湖はピンクから紫、藍から群青へと。色を変えていく。

笹子達は泥や血を洗い流し、顔を洗い、服についた汚れを落とすと、スコップを農具小屋に戻した。小屋の中には飼料桶や、鎌、斧、細断機、等ところ狭しと投げ込まれていた。

旅館の庭を横切ったところで、森丸が離れの方から慌て気味に歩いてきた。

「一体何処に行つてたんだ。部屋に戻つたら、直ぐに荷物を確かめること。紛失したものがあつたら申し出る。わかつたな！」森丸は盗難に気付いていたのだ。

「はい、はい」みんなは首を竦め、部屋の中に一塊りのまま倒れこんだ。

「ロバートがお金を置いて逃げていった、なんて言つたらやばいかな？」

「空の財布だけ捨てて行つたと報告するしかないけど、先生警察に届けるわね」

「事故に見せかけて死体を湖に捨てたらよかつたのに……」

ひそひそ話しながら着替えを終えた頃には、集団であるために心臓の鼓動も正常に戻っていた。

午前九時まで一眠りすることにした。スケジュールでは、九時半朝食の予定。

クラス委員の百合子が、森丸の鞆とみんなの財布を持って部屋を出た。

そのとき、渚がいきなりまゆみの頬をめぐらして平手打ちを喰らわした。みんなは放心したように、渚を見ていた。まゆみは暫く唇を噛んでいたが、次第に顔をゆがめ大声で泣き出した。

人殺しをした後の心労と肉体労働で、疲れ果てたせいか、笹子は前後不覚に眠った。揺り起こされた時、陽が部屋に眩く差し込んでいた。母屋の生徒達は散歩でもしているらしく、歌声が湖の方から

風に乗って流れてくる。

「あれでは見つかるのは時間の問題よ」渚は制服に着替えながら脇の下から箆子を見た。

「ロバート・スミスは今朝早く、皆さんや森丸先生のお金を奪って遁走しました。これは途中で捨てていった、空の財布です」小泉美恵の声が次第に細くなった。

「うあ！ ひどい！」「だから、もう！」さまざまな声が湧き上がる。財布は一つずつ生徒に渡され、その中に入っていた金額や貴重品の種類が書き込まれていく。

「幸い君達の旅行費や、切符は帳場に預けて置いたので難を免れた。君達の盗難にあった金は、今晚までに僕らの責任において何とかする。したがって修学旅行は継続出来る。然し旅館側と協議した結果、不良外人をこのまま放置するわけにいかないので、警察に届け出ることにした。その影響でこの旅館にもう一泊しなければならない。アメリカ兵の処遇についてミスがあったことを、引率者として詫びなければならない。済まなかった。しかし考えようによつては、この程度ですんだことは、不幸中の幸いであつたのかもしれない」森村はそれだけ言うと、足早に広間から出て行った。

二人の無能な教師に引率されているのだと箆子は改めて知った。何も見えていないのだ。

「それにしても今警察の調査が始まったらどうなるの？　なんとか警察沙汰を阻止しなければ……」  
百合子が森丸を追って行った。

「どうせ見込みのないお金なら、いらぬ。先生や私達の恥を曝すことないじゃないか、百合子はそう言ってみるって」八田礼子が小声で言った。

恥を曝す？　おじいちゃんの発想……殺人が隠されていなければ。何を本当の恥と思うかは、当人でなければわからないが。先生の考えている恥、素行の知れない進駐軍兵士を連れて修学旅行をし、盗難にあった恥。危機を食い止められなかった恥。うろたえる良心の恥。

九時半から野口英世記念館と生家を見学した。みんなは何故あんなに小さく浅い囲炉裏に転がり落ちたのか不思議だといひ、日本史が改ざんされたように、これも後になって美談として作文されたのではないかと言う質問が出ていた、殺人したあとでは、過激なことを言っていなければ不安だったのだ。

一刻も早くこの土地から逃げ出したかった。笹子も死体が気になって別の誰かを着ているように強張って歩いた。

自由行動になっても、森丸が、何故か笹子のグループから離れようとしぬ。予備学生として海軍に入り、幸運にも肋膜炎になって、生き延びた彼には死に損ないの陰影があつて、生徒達の間では、今も内部で血を流している唯一の教師だと思われていた。森丸に教えられたのは三年だが、日本史は墨で塗り込められ、何時までたつても縄文弥生文化あたりでうろろうろしていた。それでも態度の豹変

した英語教師への反感も手伝って、妙に生徒達に人気がある。

「橘は卒業したら就職するのか」霞が頷いた。

「お父さんは市役所だそうだな。何課かな？」

霞の当惑が伝わってくる、火葬場なのだ。霞は森丸の質問から逃げて、陽子たちの同情に迎えられた。

「先生、人を殺したんです」みんなギョツとして百合子を見た。

「何だって？」森丸が厳しい顔で言った。

「私、従兄弟に御国のために死んで下さいって、手紙に書いたんです。そしたら戦死してしまってあの手紙さえ出さなかったらまだ従兄弟は生きていたのにと……。殺したのは私なんだ、一生そう思い続けるんだと思います」百合子の目に涙が膨れ上がった。

「百合子の家はお寺だったな」森丸は暫く歩いてから言った。

渚は森丸を避けるようにグループから後退していった。笙子の目には痛ましい秘密を必死で守ろうしているように見えた。

「笙子は五年で上級学校に入ったのに、どうして行かなかったの？」森丸が笙子の隣りを歩いていった。

「東京は食糧難だし、混乱していて恐ろしいって聞いて怖気づいたんです。それにインフレや預金封鎖ですっかり貧乏になってしまって、父なんか蔵書を神田の古本屋まで売りにいったんですよ」

「どんな本？」森丸が興味を持って言った。

「西田幾太郎の善の研究とか、外国の哲学書とか、哲学辞典などです」

「ほう、手に入らないんだよ、再刊されたが。『善の研究』とはねえ。戦争が終わって、哲学書ブームが来ているんだ」

笙子は森丸が何かを問うように、首を傾げたのを見た。

ロバートを殺しましたと打ち明けたかった、ことは笙子達の手に余るのだ。決心して振り向くと、もう森丸はマリエに話し掛けるために足早に前を歩いていった。

旅館に戻ったとき、時計は午後一時を過ぎていた。こんな小さな旅館に二日間も滞在する不自然さも、また次の旅館に断られそうな、取り越し苦労もあって気にならなかった。昼間なのに離れの部屋の戸締りをし、笙子達は身を寄せ合った。

一番恐ろしいのは脱落者の口、互いに牽制しあい不安に怯えながら、その約束を欲していたのだ。

#### 宣誓書

「1」 私達九名は運命共同体であることを自覚し、他の如何なる人物に対しても、決してこれを告白しない。完全に個人的文書「日記など」にも、決してこれを記述しない。

「2」 私達の行為は、急迫、不正な侵害に対する、正当防衛であり、罪の意識を持つてはならない。

「3」 私達は、湖畔で夜明けを待っていたものであって、互いにしっかりとした、アリバイを主張す

ることが出来る。

「4」 私達のうち誰かが、将来、誓約に反して告白した場合は、他の全員が協力し、自白した者こそ当事者であると証言するものとする。

昭和二十三年 十月 二十日

明石 笙子

岩沢 百合子

大津 まゆみ

平 華子

橘 霞

野々村 陽子

八田 礼子

藤崎 マリエ

百合子は署名がすむと紙を畳んで、ポケットにしまった。渚に署名させて、保存するつもりなのだ。

「本当に、全員が加害者と言えるかしら？ 私は大して、力出さなかったわ」華子が言った。

「私だって」「あたしだって」

「みんなの小さな力が集まってそうだった。その証拠に、はじめロバートが死んでいると誰も思わな



かったじゃない。人間の命は案外脆いものだったのよ！」百合子が宥めるように言った。

「だからみんな半信半疑なのよ」「人を殺したときには、もっと何と言うか、その一発に強烈な手ごたえが残っているのではないかしら」

笙子も自問してみる、一番初めに手を下したのは多分わたしだ。気がついたとき、あの血がべつとり付いた石をしっかりと握り締めていたのだ。あの一発では死にはしないだろう、然し………、笙子は疑念をふりはらいたかった。

「渚はお金持っていたのよ。どうしたのかしら？」陽子は気懸かりを口にした。

「渚一人犯人でないような顔をして、警察に届けでたとしたら………」まゆみが言った。

「渚は宣誓書をまだ見ていないのよ」

「まさか？」

みんな渚の友情に祈った。渚と一緒に行くべきだったのに、笙子は森丸と話す機会を失いたくなかったのだ、そのことで胸が痛んだ。

「あそこへ行ったんだわ」もう疑う余地はない、笙子は庭に跳び出した。百合子も、陽子も走り出していた。

忘れようとしても、忘れきれない場所は、八人の目印を持ったとしても、分り難い場所だ。息を切らし雑木の下枝を潜る。

先頭を行く霞の足がぴたりと止まり、みんなが駆け寄った。そこには、枯葉と大穴だけが残ってい

た。

「ロボートの遺体がない!」「ロボートは生きていたの?」「死体が発見されたのでは……」

ぐずぐずしていたら、掴まってしまふ。といって、どっちに逃げたらいいのか、みんなの顔に色づいた木々の葉が投影し、不気味な色どりの亡霊たちが、やみくもに動いた。

どこかで鈍い音、音の爪が肉に食い込んでくるような、妙な不安を感じさせる。二度目は割合近くで……、霞が音に向って突進した。

「うっ!」霞が顔を背けている。

百合子が前進し、笙子の叫びは喉に引つ掛ってから、震える襲に巻き込まれる。

ロボートの死重に引き摺られて横転しているのは渚だ、その手にあるのは何だろうか?

そこは湖に落ちる流れに沿った岩場になっていて、柳の枝が雨のように垂れ下がっていた。投げ出されてあるのは、二本の足と、一本の腕。それに……、いま渚が格闘し、その手で持上げているのは、紛れもないロボートの首だ。首は血を滴らせながら、渚の足で歩いていた。

笙子の全身の臓器が集まって、じゅうじゅう音を立てて絞り上げられる。この人血の甘酸っぱい臭気、川の水で洗われた血溜まりは白い泡を乗せ、いま、湖に向って静かに移動していた。

「助けてよ! これしか方法はないんだから。時間がないわ、完全犯罪、証拠煙滅を目指すのよ。死体を運んで、火葬にし、墓地に葬る。骨になってしまえば、私達の勝ちよ」渚の足元には斧や鉞や飼料の断裁機が投げ出されていた。

礼子が腰からへたへた崩れ落ちた、氣を失っているようだ。まゆみが狂気に追いまくられて逃げ出して行った。

渚の思惑は死体をこの土地から、手分けして運び出すことなのだ！ 渚は氣なんかふれていない。このままでは危ない、氣がふれているのはこっちなのだ。笹子は氣を取り直した、シヨックは大きかったが、痺れのように次第に恐怖感が遠のいていった。

超自然的なものに欺かれ、みんなは、まんまと悪霊の企みに引っ掛つたのだ。みんなは作業を分担し、自分のものとは思えない手で働いていた。思つたほど血液はでなかつた、足や手は関節で分け、更に長さで調節して、切り口は渚が用意して置いた綿を当てて、シートで包み、その上を更に生花を包む油紙できっちり包み込んだ。

不気味さも、絶望と恐怖の抜き差ししないところまで来れば克服できる。みんな表情を失い生きているしるしの赤味など、何処にも残っていなかったが、死後硬直し始める死体の力に九人の力で對抗した。千切れたのは、笹子達ではなくロボートの胴体だった。皆は次第に血や肉に慣れていった、恐怖はわざとらしく、不正直に見え、渚の狂気かもしれない思い切りの良さが爽やかさになった。

渚と霞とマリエが物騒な荷物の番をし、笹子達六人が旅館に舞い戻った。幸い配給米持参の五泊七日の修学旅行で、皆大きすぎるスーツケースやボストンバッグを持参していた。持ち出すとき、修学旅行生が二泊することになって上機嫌なおかみが声をかけて来る。

「お土産に柿を買いにいらしやるのなら……」おかみは親切に、売ってくれそうな農家を紹介し

てくれる。柿を買い、陽子は金を払った。ロバートが盗んだ金は陽子が預かっているのだ、盗人はこちらなのかも知れない。手、二個。足、四個。胴体、二個。頭、一個。全部で九個。六個のスーツケースと三個のボストンバッグに詰め込んでから、空いている隙間に木炭と柿を詰め、渚がその上から焼酎を吹きかけて蓋をした。いくら医者の娘であっても、渚の用意周到さや、執拗さは、狂気に似ていた。作業が終ると、みんなは、湖畔でロバートの身分証明と服を枝木で囲って焼却した。

「思ったより軽いものなのね」ピストルを湖に投げ込んだ陽子が呟いた。

平華子が血相を変えて離れに戻ってきた。

「大変よ！ 刑事さんが来てる。ここに来る前、予約してたのに追出した、あの旅館の主人から連絡が入ったんですって」

「なんで、そんなところから？ どうする、荷物を調べられたら……」

恐怖の密度が急に変わった。視界が発光したように薄色になる、何人かは早い者勝ちに部屋から庭に飛び出していく、何人かは棒になって立ちすくんだ。

森丸の肩越しに、平べったい中年の刑事の顔が覗き込む。

「盗難は明らかに、ロバート・スマスの仕業なんです。生徒を調べても何も出ませんよ。こちらから届けるつもりでしたのですから」森丸が刑事を牽制している。

「そもいくめえ、相手は不良外人であつても進駐軍だ。後で、実は内部の犯行だったでは、ことがすまんなつす。一人ずつ荷物を見せてくれや」刑事が容赦なく言う。

「荷物なら買い物に行く時出して、床の間に並べてあります！」

百合子の声が震えた。刑事は紛失届に合せてメモをとっていく。

「財布が一つたらんなつす。野々村陽子さんはどうすた？」刑事は指を一本立てた。

陽子の手は制服のポケットから数枚の札と小銭を握って出した。

「あたし財布持つてませんから」

刑事は何度も有り金を数え直す。

「そんなもんでしよう、小泉先生のも入っているでしょうから。こんなことをしている暇に、早くロバートを追つて下さいよ。進駐軍の認識番号だつてあるでしょう？」

「そのねえちゃん。そのスーツケースを持つて来て！」刑事は一瞬鋭い眼つきになって華子をみた。華子は気分が悪くなったのか、スーツケースの上に向つ伏している。

絶体絶命、殺人犯として警察に引つ張られる、父母の悲しむ姿が笹子の頭のなかを狂つたように駆け巡る。華子が身じろぎした、刑事がスーツケースを引き寄せ鍵を奪い取ろうとしている。

「駄目！ 柿にアルコール振りかけたばかりだから、密閉しておかなくちゃならないんです」

笙子が叫んだ、それとほとんど同時だった。

「危ない！」外で叫びがあがった。

みんなは窓に張り付いた。風が出てきたのか白い物が風のまにまに舞いあがったり、舞い降りたりしている。その正体がスリッパやズロースだと気付くまで暫くかかった。渚の下着が風に舞っていた。くらげのように舞っていたスリッパが、斜めに素っ飛ばす。

風が洗濯物を吹き飛ばしているのか、それとも誰かが屋上で……？

「渚さん」「危ない！」口々に叫んでいた。

「お止めなさい。渚さん、もう、これ以上、心配させないで！」

小泉美恵の押さえた声。笙子が庭に飛び出すと渚は屋上の柵の上に立っていた。

「危ない！」渚のスカートが風に引っ張られる。

「渚さん。動いては駄目よ、いいですか」小泉美恵が建物に沿って横に歩いた。刑事が非常階段を登って行くのが見えた。

「渚、お父さまみたいに、とうとう気がふれたのかしら？」誰かが上を見ながら呟いた。渚は一人でどんな地獄をみたのか、笙子は指先の匂いを嗅いだ、血の匂いがした。笙子の気持次第で渚は笑っているようにも、泣いているようにも見えた。何時からいなくなっていたのだろう。もしかしたら、みんなが旅行を中止して帰る理由を、作っているつもりなのではないか。いや、もっと……。刑事にあわや旅行鞆を開けられそうになっているところを……。

笙子は慌てて地面に落ちている硝子の破片を払い除けた。旅館のおかみがベランダから蒲団を投げた。総身の毛が逆立っていくのがわかる。渚の何処までが本当で何処からが狂気なのかわからない。狂気とすれば、あの時の行為こそ狂気だったのに、狂気に乗せられてしまったのが笙子たちなのだ。渚はバランスを失って大きく傾いた、傾く度にみんなの悲鳴が高くなった。渚が落ちて来る。

そう思った時、笙子の目に渚の体がしっかりと、森丸の腕に抱きとられるのが見えた。

「あんなに綺麗な顔をして、何が不足なんだろうねえ」おかみが怒って言った。

刑事は何事もなかったように華子のスーツケースの中を調べた。中は柿で一杯になっていた。

刑事が帰ると、種明かしをするようにスカートを捲って見せた、そこには油紙に包まれた長方形の包が隠されていた。華子はあの騒ぎのなかで柿を一人で詰め込んでいたのだ。

渚は小泉美恵に睡眠薬を飲まされて、静かに寝息を立てていた。

翌朝、ポストンバッグは異様な重さで、足にまといつき、笙子は思わぬ回転をする。この恐ろしい難関を通り抜けなければならぬ、笙子はロボットの首から逃げたかった。それなのにポストンバッグの中でロボットの首が独自の動きを始め、一人で転げ回って止まらないのだ。

必死の思いでそれと戦いながら歩く。みんなもそれぞれの荷物の中で、ロバートの欠片に激しく反撃されているのかもしれない。

「柿の種くらいにしておけばよかったんじゃないのか？」森丸が言った。

「種じゃあ、八年も待たなきゃ食べられませんでしょう」

陽子は森丸が持つてあげようとしても決して手放さない。足の半分だから楽なのかもしれない。

「先生、私を持つていただけませんか。手が抜けそうなんです」途切れ途切れの声でいってしまう。森丸にポストンバッグを手渡し時、笙子の手と脛と口元が激しく痙攣しているのがわかった。ロバートの重みが森丸に移ると、笙子は息を吹き返した。

持っただけで森丸は異常さに気付くだろう。これは宣誓に対する裏切りかもしれない。

「さあ、元気をだせ！ もうすぐ駅だよ」

死者の首を森丸に持たせる、笙子はこれが彼に伝えられる限度だと思う。森丸の眼を見上げた笙子の眼差しが絡み合った。自分の顔の青さやおどした不安まで、読み取られたに違いないと笙子は思った。

「私のも、先生！」陽子が切実な鼻声を出し、周囲が変な笑い声をたてた。

森丸は駅の手前で、どさっと笙子の手をポストンバッグを押し付けた。気付くと百合子と礼子が心配そうに笙子を窺っていた。

渚は制服の上に流行のベージュのコートを着ているのに、この二日間で何キロも痩せたのではない



かと思うほど、ほっそりし、目だけぎらぎらしていた。

「こんなことがなければ、松島、十和田湖と旅行を楽しむことが出来たのに……」礼子が嘆く。

「寒くても窓は開けておきましょう。郡山で乗り換えで大宮で下車。後は車で町までいく、駅には藤崎精肉店のトラックが来ているから、それに乗って、星雲寺まで四十分よ。わかったわね」

「了解」こうなつては、百合子に全面的に信頼を置くしかない。

渚が跳び上がった。鉄道公安官か、取締りの警察官らしい男が、隅から荷物を改め始めたのだ。狼狽した笙子達は恐慌状態に陥った。昼間の列車なのに闇米の摘発が目的なのだ。

「渋柿なんです。酒を振りかけて密閉してあるから、あけられないんです」霞が言った。

「うまいこというね」取り締まりの男が言った。

「ああ、この生徒達は修学旅行中なんです。僕が責任者です」森丸が取締官の前に仁王立になった。それでも男は旅行鞆の厚い皮の上から中身を探るようにし、柿をつかむと笑顔を作った。

森丸は肩を怒らせ、今にも泣き出しそうになっている九つの顔を、強い視線で見下ろしていた。郡山で乗り換え。連絡が悪くて二十分待ちになつていた。

「私達、普通科八人と家庭科の大津まゆみさんの九名は、牟田渚さんをお家まで送り届けるために行動を共にすることに致しました。渚さんもそれを強く希望しています。ですから上野行に乗り換えませう」

百合子が言った。

「あなた達、言ってることが分ってるの！ 他の生徒や先生の立場も考えてものをおっしやい！」

小泉美恵が声を荒らげた。

「私達ここから、修学旅行を中止して帰らせて頂きます」笙子がいった。

一学年、一学級、二科の構成員である家庭科の生徒は東北本線下りのプラットホームに佇んでいた。

「実力行使のつもりなんでしょうか？」小泉美恵が森丸に言い、生徒の説得を試みたが、森丸は生徒の方を見ようともしない。

笙子と百合子は決定事項として、上りホームに歩いた。

教師を無視するしかない、とても打明ける訳にいかなかった。そうすることが森丸や小泉美恵を苦しめているように笙子には思えた。しかし、これ以上知ったら教師としての立場がなくなるのだ、いまはこうするしかない。

「手がない、手がない」列車に乗った途端、渚は手首を一捻りして喚き始めた。笙子の制止も聞かず、列車の中を必死に探し回る。

渚の口に蓋をしたくなって差し出した手を、渚は乱暴に払い落とした。見るとホームに渚のスーツケースがぼつんと置き忘れられていた。

発車寸前、ホームを走ってきた森丸が、ロバートの片腕入りのスーツケースを拾い上げ、動き始めた汽車に取り付いた。みんなは、震える手でスーツケースをリレーしていき、網棚に載せ九個目の荷物をしつかりと括りつけた。

「きみたちは集団中毒の為、修学旅行を中止して帰ることになった。僕は同行し、牟田渚を自宅まで送り届けてから、トンボ帰りして一行と合流する」

森丸は事務的な口調で言った、みんなの顔つきが柔らかくなった。

「妙なものね、ロバートを取り囲んでいた家庭科の人たちが遭ってもいい事件を、私達が諸に被ってしまったなんて」

笙子と百合子は顔を見合わせてから、そつとまゆみを見た。一人家庭科から入り込み、総べての震源地だったまゆみは、さすが疲れたのか胸に顎をくっつけて眠っていた。

「まゆみがこっちのグループに移っても、家庭科の人たち平気な顔して怪しまないのはどうして？」  
笙子が呟いた。

「まゆみは敬遠されているのよ。美人過ぎるから」百合子が言った。

網棚から死臭が流れ出していた。みんなはそれを気にして嗅ぎつけ、周囲におどおどした視線を彷徨わせた。

「手がない、手がない」悪童が一人、渚の顔を窺いながら大声で真似をして見せた。

それぞれにスーツケースや旅行鞆をしっかりと持った。

大宮駅で下車する時、百合子は乗車口に足をとられて、スーツケースをプラットホームにたたき落した。スチール・ファイバーの蓋に斜めの大きな亀裂が走った。百合子を囲んで立ち往生している傍を占領軍がガムを噛みながら通り過ぎる。MPがいるかもしれない。みんなの寄せ合った体に震え

が伝染していく。森丸が手拭を裂いて結び合わせ、胴体に入ったスーツケースを括った。

「さあ、あと数分だ、元気を出せ、笑顔で歩いて行くんだ。美しい女子高校生の一行に見とれているうちに改札口を通過出来る」

森丸が渚のスーツケースと自分の鞆を持ちながら言った。

それぞれにロバートの部分を持って、女子高校生がホームを歩いていた。幾分緊張した顔を上げて歩いて行く女子高校生のスーツケースやボストンバッグの中身に、擦れ違う人々がどんな想像も働かせないうちに、みんなは改札口を出ていた。

渚は森丸の腕に縋り、妙に子供じみて見えた。森丸はタクシーを拾い牟田渚を乗せてから言った。「気をつけるんだよ。慌てるな！」

藤崎精肉店の中型トラックに荷物を移すと、みんなは荷台に乗り込んだ。頭数は八つ、全部で九個の荷物が荷台に揃っている。此処までは何とか成功したのだ、荷台に凭れている筈子の疲れも限度で、全身の骨組みが音を立てて崩れて行くように思えた。

渚は家に辿り着いただろう。うらやましいと思っただが、彼女を出迎える母親の大きな動作が目に見えても、どんな父親も思い浮かばない、牟田一族は秀才揃いだ、年頃になると精神がおかしくなるといふ噂があった。それが渚を見る目に影響を与えているのは否めない。まるで、渚の発狂を待っているような妙な気分になることもあった。

「私このトラックなら、運転できるのよ。星雲寺についたら運転手は返すからね」

マリエが得意そうにハンドルを握る仕草を試みせた。

予定より早く星雲寺の山門に入り、星雲館は星雲寺の信者の宿泊所だ。玄関から廊下伝いに広間があり、曲がると小団体用の部屋が続いていた。

「おや、百合子さん、今日は何のお集まりですか？」僧職の男がのんびりした声で言った。門の中の天をつくような仁王様、畳ほどある大わらじ、両脇に並ぶ前寺の一つが百合子の家、窓を開け放つと山々が驚くほど近い。視線を左右させると、遠くに火葬場の白い煙突が目に入った。

マリエと霞と笙子は九個の荷物と共に火葬場に向った。運転席のマリエは黒の上下に着替え、野球帽を被っており、荷台の霞と笙子は制服のままだ。小さい頃、人の焼ける匂いに息を止めて走り過ぎていた火葬場への道を車はためらいもせずに入り込んでいった。

マリエは生け垣の傍に車をびたりと止めた。瓦屋根、平屋の建物の中に入ると、太い柱に支えられているガランとしたホールがあり、柵を安置する木の台が二つ、その奥には耐火煉瓦で作られた焼き場があつて、厳しい金庫のような扉が二つ付いていた。

「お父さーん！」霞が呼んだ。

「霞か。修学旅行は一週間だったんじゃないのか？」

霞の父親が不審そうな顔を出した。

「お土産の酒を持って来たのよ、お父さん、闇の特級酒。親孝行でしょう。ああ、それから、友達が見学したいって、いうから連れて来たよ。誰でもお世話になるところだからって……」

「そうだな、これだけは誰も逃れられない！」

霞の父親、橘九平は満足そうにいった。三年前、此処の火葬場の老人が死ぬと、長年勤めていた有名会社を辞め自分から火葬場を志願したのだ、徴兵逃れではないかと噂する人もいた。

「特級酒とは、よく手に入ったもんだなあ。今日はこれで仕事はないし、一ぱいやるか！」九平は笥子に笑顔を見せた。

特級酒は礼子が八田酒店の顔を利かせて手に入れたもの。九人の全てが自分のなすべき役割を探り、必死で責任を分担しようとしていた。

橘九平は飲み始めた。渚の睡眠薬の効果で、暫くすれば、眠り込む筈。

霞がVサインを出し、笥子はマリエのところまで走った。霞は積み木のように薪を組み立て、笥子とマリエは九つの荷物を運び込んだ。最後のスーツケースを持った笥子の手が戸惑っている。

「どうしたの？」霞が案の前で不審そうな声をだした。

「軽い！これは違う！」

「違うって？違ってたまるんですか」マリエが言った。

軽い、確かにすり替わっているのだ。どこで？いつ？急いで開けてみる。男もののシャツ、ネクタイ、二三冊の雑誌、洗面具、運動靴。三人の影が裸電球の下で大きく揺れ動く。

「全部調べ直そう！」霞が息だけで言った。

すっかり閉じられ、運ばれてきたスーツケースやポストンバッグに鍵を差し込んだ。柩を載せる台

の上に油紙に包まれた屍体が、それぞれの形を見せて落ちる。頭、一個。足、四個。胴体、二個。手一個。

手が足りないのだ。渚のスーツケースがない。

片手のないロボートは積み重なって堆くなくなった。逡巡している暇はもうない。三人で竈に全力で押し込み、間違えて持ってきたスーツケースも後から投げ込んだ。

霞が火を入れた。火は小さなローソクのようにゆるやかに燃えてから燻り、生きているものを、生きたまま炎にしかねない不穏さで立ち上がった。やがて四方に向って炎を分散させ、ロボートの周りで走り回ってから一気に爆発した。炎は大きく揺れ動き、影は舞い上がって天井を這い、炎の舌で嘗め回る。火の中でロボートが白い唇と金色の眉で見ているものを嘲笑する。ごうごうと音は耳を押し、三人は業火に巻き込まれ、恐怖に身を細めて立っていた。漸く気を取り戻した時、みんな小さく短く息をしていた。

空のバッグ類をトラックに載せ、マリエが、ひとまず星雲館に戻る。

「どんどん薪を入れるから、あと三時間もすれば全部が粉になるほどに焼けると思うわ。最後の辛抱よ」霞が自信ありげにいう。これで、もう、ロボートである証拠はなくなるのだ。

黒い翼のようなものが、またたきと一緒に動く。とろとろと眠りはじめる。座りの悪い三脚椅子の脚が、下のたたきのかげに落ちてガクツとした。カタンカタンという音、九平だろうか、それとも誰かが来たのかもしれない。笙子は咄嗟にあかりを消し、忍び足で、がらんとしたホールを横切り細め

に戸を開けて外を覗く。見えないが、誰かが遠ざかって行ったような気がした。

笙子達は戸締りをし、肩を抱き合って蹲った。

「父なら酔いつぶれて帰らないことがよくあるから、母は心配しなんかしない」霞がいった。

焼けた骨を引き出し、二人で何度も台を揺ると、多孔質になった骨が、殆ど骨格の形を留めない程砕けていく、胸は怯えるのを止め、まだ暖かい骨片をボール箱に移した。

「ああ、来たア!」「終わったあ!」

ふたりが星雲館の部屋に入ると、みんなは手を取り合い、張り詰めていた緊張から解放されて、泣きじゃくった。

「わたしたち、生き延びたのね。生き延びた? 軍事法廷に引き出される事もない」「彼も進駐軍でなかったら、修学旅行についてくるのを断れたのに……」「でも渚だけが。ロバートに文句をいったわ」話しているみんなにまゆみが顔を捻じ向けた。

「あれほど支離滅裂なことをいったのでは、文句をつけたことにはならないわ。結局、頭のいかれたところが、ロバートに付け込まれたのよ」



「その言い方では、渚が原因みたいじゃない。とんでもない！」笙子は我慢が出来なくなっていた。「そうよ、渚がおかしいと思ったから、ロバートがみんなのお金を盗ませた。いくらなんでもロバートみたいな男が部屋に入って来たのなら気付かれるでしょう。誰にも気付かれずにあれだけの盗みが出来たのは、渚がロバートの言いなりになったということよ」

まゆみは一度も口ごもりも、ためらいもなしに言った。誰にも見られていない自信で、渚のいないことをいいことにして、罪を渚に転嫁し、自分の名誉を守る作戦に出たのだ。

「違う、わたしはまゆみが盗むのを見ていた、ついさっきまで、これだけは黙っていようと思っただけど、もう黙っているわけにはいかなかったわ。卑劣！」笙子はまゆみを睨みすえる。

「よしなさい！ 笙子。わたしたち仲間割れなんかしてられないのよ。まだ渚の持っている片手がある。片手一本だって、わたしたちを殺人者だと指差すことが出来る」百合子は言った。笙子は友情が裏切られたような気がした。

そのとき、まゆみが笙子に殴りかかった。何人かの手がまゆみを押さえ込む。

長い沈黙が続いた。笙子の耳に、渚がまゆみの頬を叩いた時の音が甦った。

「あのとき、もしかしたら、まゆみはロバートの味方になって、渚を見殺しにしたんじゃないの？」

みんなの目がまゆみに釘付けになる。まゆみが首を振る度に長い髪が左右の顔を交互に隠した。それは両面性のあるからくり人形のように笙子を惑わせる。

「それにしても、笙子は、まゆみの盗む現場を目撃したのなら、何故、その場で押さえるなり、みんな

なに知らせるなり、しなかつたのよ！」八田礼子が漸く気がついたように言った。

「それは……」笙子が口ごもると、まゆみは活路を見出したとばかりに、その言葉に飛びついた。

「だから渚と笙子はグルなのよ。みんな騙されないで。二人は私を陥れようとしているの。私はロバートと渚が外に出ていくのを見て、後をつけたのよ。二人はお金をつぎつぎ取り出してから、財布を捨てたわ。その後でロバートが渚に襲いかかったのよ。私、体がたがた震えたわ。でも何とか百合子に知らせたのよ。私、精一杯のことはしたわ」

笙子は弁明をしなければと思いつながら、まゆみが森丸の部屋に入っていったときの、自分の異常な心理状態を指摘されたように弱気になった。まゆみは語るに落ちているのだ。

「そんなことより、早くお骨を土に帰しましょうよ。それがすむまでは安心できないわ」霞がたまりかねていった。

「それが、駄目なの。ここに埋めることはできないわ。言ってみてわかって貰えることではないし、父は雇われ住職なのよ。私は一門に迷惑をかけるわけにはいかなかったわ」百合子がいいわけを恥じて悲惨な顔つきになる。

「そんな、今になって卑怯だわ」霞が逆上している。「わたしは父を騙し、睡眠薬入りのお酒を飲ませてまで、自分の務めを果たしたつもり」

「それぞれが何か声を上げていた。」

「このロバートの骨、まだ骨だと解る部分、これを粉にして、その骨を川に流すことにしましょう。」

これで本当の完全犯罪、証拠隠滅になるわ」マリエは静かに言った。

川はさざなみを広げ、ロボートの粉になった骨を乗せて流れていた。骨は水分を含み、ゆつくりと沈みながら運ばれていく。

空は董色を帯び、朝は明けようとしていた。撒いていた華子が手や服についたロボートの粉を、神経質に払い落とした。

ロボートの手の入った渚のスーツケースは、渚が持ち帰ったのか？

笙子は疲労してへとへとだった。あとはどうなってもいい、もう、これ以上深追いはしない。みんなは、ロボートに飽いてしまってもいた。

授業が始まっても、渚は欠席を続けていた。あの手は渚の家に持ち込まれたに違いない。それが今後どんな発展の仕方をするのか、予想も出来なかった。

となりの席から細い肘をついて笙子の机に身を乗り出し、自分がいつどうなるのかわからない精神

的不安を囁いた、ふっくらした唇、笙子はあれから渚の家の前まで、なんだか行ってみた。

勇気を振り絞ることさえ出来たら、引き返したりはしない。逡巡するのは、渚にいきなりロバートの手を突きつけられるかも知れない恐怖。

二カ月後、笙子は息を呑んだ、新聞の社会面からロバート・スマスが顔を出していたのだ。

見出しに眼を移すと、「修学旅行生狙いの」とあり、白抜きの大きな活字で、『贖進駐軍にご用心』とあった。笙子の目は贖の文字に戸惑い、また右肩から見出しを読み返した。体中の血液が下降し、白くなった網膜に、ブロンドの髪をじろじろみたととき、笙子を射すくめた凄い目つきや、邪魔ばかりしている、といった時の憎悪の表情が大写しになった。

……今年、春から秋の修学旅行シーズンにロバート・スマスと名乗り、修学旅行の女子高校生を狙い、窃盗、暴行、詐欺を働いていたアメリカ兵のいることが、旅館、ホテルの被害届や通報によって判明した。警察の調査によると、この男は日本国籍、住所不定、坂本豊（二十二歳）外語学院を三カ月中退、家出中であることが判明した。犯人は色の白いことを利用し、髪を金髪に染めている為、被害者も白人と信じて疑わず、被害に遭っても泣き寝入りするケースが多かったものと思われる。

県警では犯人の行方を探すと共に、旅館等に手配写真を配布し、注意するように警告している。……これは紛れもなくロバート。ロバート・スマスだ、ロバートは自分の正体を笙子や渚に見破られたと思ったのに違いない。口封じの為にやられたのだ。

まゆみは何も彼も忘れたように、相も変わらず我がまま一杯、勝手気儘に登校していた。もう高校

生活も残り少なくなっていた。

ターミナル駅にある美容室で、笙子は髪をセットして貰っていた。隣の椅子にロングヘアの美しい女が座っていた。笙子が週刊誌を読み耽って、ふと眼を上げると、となりの鏡の中で女はじいっと笙子を見つめている。

柔らかい髪が豊かに波打って、寂しそうな逆三角形の顔を縁取っている。笙子は美容師の手に押さえられた髪の毛根が一斉に疼き出したような気がした。

十八歳。あの時、缺の入った過去。

「わたしは、さつきから気付いていましたのよ」牟田渚がいった。

「まあ！ 私はあの後何度も何度も、お宅の前まで行きましたのに……。でも勇気がなくて入れませんでしたわ」

「笙子さんは引越されて、住所も不明の俣でしたから、どうなさっていらっしやるのか案じておりました。事件の後、わたし、一年間病院に入院していたんですよ。二年遅れて、医大に入りました。今は大学病院の医局にいます。その内、田舎に引込まなければならぬと、覚悟はしていますのよ。」

母も弱って参りましたから……」

渚が医師になった！ 笙子は長い間の重荷を降ろしたような気がした。

「高校の先生をしていらっしやるんですってね、美容師さんからお聞きしたんですよ」

「ええ、お蔭で、修学旅行に行く度に、死にそんな思いをしていますわ」渚はかすかに頷いた。

「産婦人科ですか？」

「外科ですよ。思い当てることがありません。後でしみじみ考えてみたんですけど、われながら、十七、八でよくやったものだと思います。大丈夫ですよ、時効ですもの。あのお荷物、割合に臭気がなかったでしょう、子供ながらに、手の込んだことをいたしましたのよ」渚はいたづらっぽく笑った。考えて見ればアルコールの臭いはしたが死臭はなかったのかもしれない。臭気ばかり心配して嗅ぎつづけたから、逆に死臭が強かったような意識が残ったのかも……。

美容院を出ると、二人は静かなレストランを選んで向かい合った。

「あの頃のわたし、勝手なことを言って、貴女を脅していたのではないのかしら。何しろ十九歳を死に時と置いていましたから、わたしのような父を持つて生まれた少女には、自分がどうなるのかわからない不安は、並大抵なものではなかったのですよ。感受性の強い年頃でしたわ。結局わたしが原因になって、みんながロバートをやっつけたんですもの……。わたしがなんとかしなければ、そう思っただんです。それがかえってみんなの負担を増加させる結果になってしまつて、ごめんなさいね。特に笙子さんは頭を運んでいらしたから、大変だったでしょう」

「そんなことないわ。あなたのおかげで随分きわどいところで、何度も助けて頂いたのだと分っているつもりです」

「森丸先生はみんなの意思に反して、わたしのスーツケースとご自分のものと、取り替えてしまわれた。わたしには先生の意図がすぐにわかりました。……先生はそうすることで、いざという時には、わたしを精神病にして、八人の生徒を救う手段を留保なさったんですよ。それが解かったとき、わたしは泣きました。だって森村先生が大好きだったのですもの。泣きながらロバートの手の入ったスーツケースを抱え込んでいました。目論見と違ってしまい、どうしたらいいのか分らなくなりました。あの混乱ぶりはご想像できませんでしょう。これで、母もわたしが完全に狂ったと判断したというわけです。あの手のおかげで。それでもわたしは、警察に知らせるの、森丸先生に話をききたい、という母を必死で引き止めていました。精神病院に行っても、成り行きが気になって、毎日、新聞を読んでいましたから、ロバート・スミスが贖者だったということは知ることが出来ました。ロバートも傷つけていたでしょうけれど……。空しかったわ。英語の初歩が戦争で空白なのが、もろに暴露されたんですもの。……ロバートも考えたものですね。戦後の価値観の大転換で自信を失った弱気の教師と、手頃な小人数で、外国に憧れながら英語力の無い、うぶな女学生が面白いように引つ掛かったんですもの。今から思うとロバートの英語、かなりいい加減なものでしたわね。でも恐ろしいのは狂気を演技しているうちに歯止めを失ってしまうことなんです。今度は強い薬剤に電気ショック。それでもわたしなりの知恵と執拗さで、正気を取り戻し、主治医に退院してもいいと思わせるまでに一年もかかっ

てしまいました。その長かったことといったら……」

渚はここで絶句した。笙子は今にも立ち上がり渚の肩を抱きしめ、渚一人を苦しませて顧みなかったことに對して、許しを乞いた思いに取り付かれていた。

「そうでしたの、卒業してから町を離れ、あのことは忘れようと努めてまいりましたから、いまの気持はどんな言葉にしても表せないくらいです！」笙子は渚が痛まし過ぎて安っぽい同情の言葉は口にしたくなかった。

「それにしても、まゆみさんが、何故あるときロバートの為に盗みまでしたのか？」

「まゆみは自分の意志で駆け落ちの資金を工面したんですよ。勿論ロバートの計画にまんまと乗せられて、資金集めをかって出たんでしょうけど。絶世の美女だくらのことは言われたのでしようし、夜道を歩きながら耳もとで綺麗だ、愛していると、何回も繰返されたら、まゆみでなくてもそうなたかかもしれません。……あのときわたしは眠れなくて三時頃から目覚めていました。すると雨戸の軋む音を聴いたんです。出てみると、まゆみが旅行鞆を持ってロバートと出て行くところでした。わたしは後を追いました。』ついて行つては駄目よ。騙されて捨てられるだけなんだから』忠告したんです。なのに、まゆみは三日後にロバートがアメリカに帰国することになってから、時間が無い。わたしたちアメリカで結婚するのだから、心配はないし、アメリカで暮らすのが私の夢なんだから、チャンスは逃すつもりはないと、逆に見逃すようわたしを説得する始末でした。わたしが途方にくれた時です。いきなりロバートがわたしに襲いかかって来たのは。正体を見抜かれたと思ったのでしよう、



わたしは、まゆみに助けて欲しいと頼んだのです。それなのに、まゆみはロバートをけしかけたんですよ。それから逃げ出していきました」

渚は言って苦笑した。まゆみを救いながら、窮地に落された無念さは？ まゆみを許すことが出来たのだろうか？

「まゆみに対抗意識をもっていたのは、もしかしたら、わたしの方だったかもしれませんが。だから探偵みたいに執念深く、後を追っていったんです」渚は笙子の問いを察したように言って微笑んでみせた。

「ところであの手はどうなったのかしら？」

笙子は話題を転回させた。

「気にしていらしたのね。いつか、うちの病院で、霞さんのお父様に会いましたの。ロバートの手は、病院の胎盤や子宮や卵巣などと一緒に火葬場で焼かれたのだそうです。戦後、もとの会社に戻りたくて迷っていらしたのが、あの事件ですっかり自信を持てるようになったと……」

「ということは、知らん顔をして下さったということですか？」

「最愛の娘が犯人の一味であってみれば、霞さんのお父さまも、うちの母も黙っているより方法がなかったんでしょう」

笙子は何度か言いよんどから口を開いた。

「それで、森丸先生はいまどうしていらっしゃるのか、ご存じかしら？」

渚はその問いが聞こえたのか聞こえなかったのか、雨足の強くなった戸外に気を奪われているように見えた。

「森丸先生は勘付いていらつしやった。先生はわたし達の犯行がばれても、ばれなくても当然、教師として責任をとる覚悟をしていらつしやったんです」渚はそこで息をついだ。

「森丸先生は、みんなの卒業した年の五月三日、自殺なさいました。缺で頸動脈を切って……………」  
「ご存じなかったのなら、お知らせしない方がよかったですかしら……………」

「先生はもう生きてはいらつしやらない、そうおつしやったのですか？」

笙子には渚の話している言葉が、何ひとつ聞こえなくなった。

「わたしたち森丸先生に、死んで欲しいなんて一度だって思わなかったのに……………」

完